

掌編小説「子、親を選べず」その4



真之介君の家では、ご飯はお父さんが作ります。真之介君も偶に作る事がありますが、殆どはお父さんが作っています。

それは、食事作りは大人の役目だからと言うより、真之介君が作ろうとするとお父さんが余りいい顔をしないからです。

何故いい顔をしないかというと

「いやっこれ、今、うちが遊んどうねん。邪魔、せんといてえ」
なのです。

時々、真之介君はお父さんと自分、どっちが大人でどっちが子供なのかよく分らなくなる時があります。

お金を稼いでくれるのはお父さんなので、間違いなくお父さんが大人だとは思いますが、素振りや仕草を見ると、はつきり言ってお父さんの方が「ガキンチョ」にしか思えない事が多々あります。

お父さんは時々

「わしの天職は主婦や。料理好き。お掃除好き。洗濯好き。お片付け大好き。絶対天職は主婦やで。わしみたいの嫁にしとったら、そりゃ、もう。旦那さんは幸せやで。まっ、そねえな男趣味、わしには、なげどなあ」

確かにお父さんは、いなくなつたお母さんより「数段、主婦」です。

ママにちよこちよこ良く動き回ります。でもそれは、貧乏性と言うより、何だか「整理整頓好き」といった方が当たっている気がします。それも「片付いていないのがイヤ」のではなく「端からどんだん片付いていくのが、嬉しくてたまらない」といった趣で、最早趣味道楽の様な雰囲気です。

この料理にせよ、主婦が天職にせよ、真之介君にしてみれば、一見「何もなくてすむから楽ちん」科というと「あれは、すなっ。これも、せんときつ」といわれる方がイヤでしたし「片端から片付けられるのも追い立てられる様で」落ち着かずイヤでした。

お父さん等というものは、多少間が抜けていて、何もしないでゴロゴロしていてくれた方が、

真之介君にとっては突っ込み甲斐があつて、楽しいような気がしていたのです。

「そういえば、おかんが出て行ったのも、案外、おとんに、主婦の座を取られてしもうたから、かも知れへんなあ」

そんな子供とは思えない様な感想を抱く事もありました。

そういえばいなくなる前お母さんは時々

「お父さんの真面目なところが、大嫌い」

と言っていたのを思い出しました。

真之介君にしてみればガキンチョみたいなお父さんのどこを見ると真面目という言葉がでてくるのか不明でしたが

最近ふと思つたのは、

「おかんは、料理本を見てきちんと測つて食事を作っていたけど、おとんは、何も見ないで、適当に作っていた。一見おかんの方が几帳面に見えたけど、何となくいやいや作業をしている感じだったのに対して、おとんは、納得するまでやとつたし、たのしそやつた」

その熱心さを「真面目」といつて圧迫を感じていたのではなからうか？など。

確かに、おとんが、いると「子供の鏡が隣にいる」様で、おかんは主婦の座を、自分は子供の座を奪われた様で、余り良い気分にはなれなかつたのです。

注) 写真は「極主夫道」より